

## 古代大宰府と前畑遺跡

佐藤 信

### 1. はじめに

筑紫野市の前畑遺跡は、2025年3月10日に国史跡に指定された。国指定史跡は、「わが国の歴史の正しい理解のために欠くことができず、かつその遺跡の規模、遺構、出土遺物等において、学術上価値ある」遺跡が文化財保護審議会の答申を経て指定される。旧石器時代から現代まで、北海道から沖縄までの国指定史跡は、1,900件ほどになる。

史跡に指定された遺跡は、調査・研究により確認された歴史的・学術的価値を発信しながら、良好な状態のまま後世へ伝えることが必要となる。調査・研究を進めて歴史的・学術的価値を高めるとともに、史跡指定地の公有化などを進めて保存・整備・活用を行って史跡公園として市民・国民に提供することがめざされる場合もある。

### 2. 前畑遺跡

前畑遺跡は、大宰府中枢部の南東方の丘陵上に、自然地形の高まりを活かしながら長さ558m以上にわたって築かれた人工の土塁状遺構である。時代的には、7世紀中～9世紀後期に機能したと考えられている。大宰府中枢の施設を広域に取り囲んで守る外郭施設として、山城である北の大野城、南の基肄城、東南の阿志岐山城や北方の水城・小水城などとともに、南方のとうれぎ土塁・関屋土塁ともつながる機能を果たした大規模な遺跡として、貴重な遺構といえる。

大宰府をとりまく周囲の丘陵上の自然地形を利用し、土地を削り出したり、平坦にして版築するなどして土塁状の高まりを廻らせた大規模な遺構であり、国家的に築かれた構造物と評価される。北の博多湾の福岡平野側と南の有明海の筑後平野側をつなぐ囲郭状施設の南方の外郭防御線として機能したと考えられる。

大宰府都城の南方を守る施設には、北方の水城・小水城と同様な施設として、平野部にとうれぎ土塁・関屋土塁などがすでに知られているが、前畑遺跡は南方の丘陵上に延びる土塁状施設として平地部土塁と連携して大宰府を広域に取り囲む施設である。大宰府へと進入する南からの交通路に対面する役割も果たしたと思われる。大宰府に向かう正面としては、北方の博多湾側からと同様に、南方の有明海側からも進入口があることから、南からの外敵の侵入コースに対する防御施設として、前畑遺跡も評価される。



### 3. 大宰府をとりまく外郭

前畑遺跡は、都府楼（大宰府政庁）など大宰府の中枢部を取り囲み、北の大野城、南西の基肄城、南東の阿志岐山城などの山城群、北方博多湾から進んでくるコースをふさぐ水城・小水城などの防御施設とともに、大宰府都城を広域に取り囲む外郭施設として機能したと考えられる。

大宰府の府郭を広域に取り囲む「羅城」施設を推測した阿部義平氏の説では、前畑遺跡の位置そのままではないが、広域な羅城ラインが展開したと推測している。これまで、日本古代の都城では藤原京・平城京・平安京にも羅城は存在しないと評価されてきたことから、日本古代には羅城はなかったと考えられてきた。しかし、阿部義平氏は、飛鳥京にも丘陵尾根線をつなぐ形で羅城ラインが展開したと推測し、大宰府においても丘陵尾根状地形をつなぐ形で広域の羅城の存在を推測したのであった。

古代朝鮮半島において、百濟最後の王都扶余の発掘調査によって、大河錦江の南に沿った扶蘇山城とその南面の王宮を中心とした扶余の都を取り囲むように、羅城の土塁・石垣・門・堀が巡っていることが明らかになっている。660年に唐・新羅連合軍によって陥落した百濟王都扶余における羅城の存在は、示唆的である。

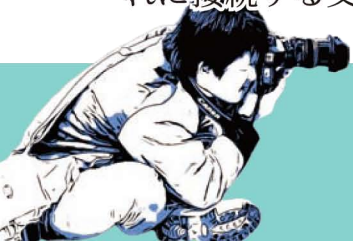
663年の白村江の敗戦を受けて日本列島に渡ってきた百濟復興勢力の王族・貴族のうち、亡命百濟将軍たちの指導のもとに大宰府を守る大野城や基肄城の古代山城が築かれたとする『日本書紀』の記事にみられるように、百濟系の軍事的・技術的な影響のもとに大宰府防衛施設が構想されたことは十分に考えられる。水城の発掘調査成果でも、版築、敷粗朶や柱の埋め殺し工法などに、半島・百濟系の技術が確認されている。

そうした一環として、大宰府府郭を広域に取り囲む羅城の計画が採り入れられる可能性はあり得るかもしれない。ただし、大宰府の羅城については、その全貌の確実な遺構は明確ではなく、なお調査・検討を続ける必要がある。

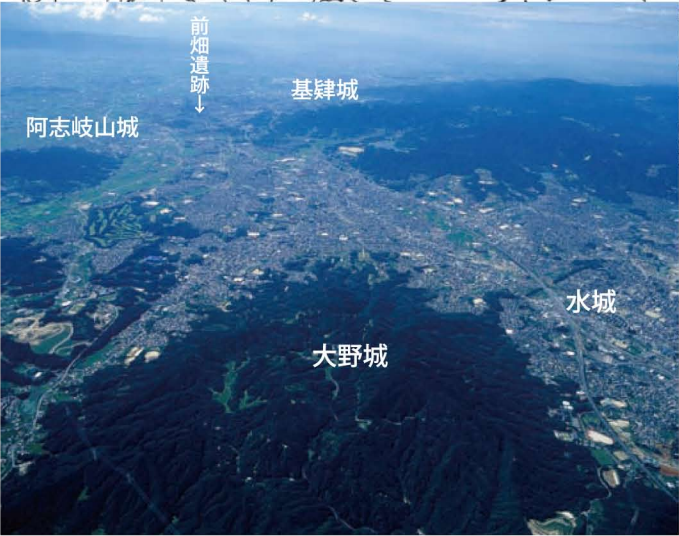
前畑遺跡も、それにつながる土塁状遺構の位置や構造そして伴出遺物などによって、さらに遺跡のあり方が解明されることを期待したい。

### 4. おわりに

大宰府を守るための大野城・基肄城・阿志岐山城などの古代山城やそれにつながる水城・小水城などは、663年の白村江の敗戦を受けて築かれた。大宰府南方にも、とうれぎ土塁・関屋土塁などの土塁とともに、丘陵尾根を利用した土塁状遺構として前畑遺跡などが長く延びている様子が知られた。博多湾側のみでなく有明海側においても、こうした大宰府を広域に取り囲む土塁状遺構が存在することは、羅城とまで言えないかもしれないが、国際的緊張のもとで大宰府郭やそれに接続する交通路を守る施設としての性格があった可能性がある。



国史跡指定記念 古代史トークセッション in 筑紫野  
歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～



大宰府遠景  
(大野城跡上空から南方を望む)

かつて阿部義平氏によって提唱された大宰府周辺の  
地形と羅城復原図（前畑遺跡の位置を加筆。）

阿部義平 1991「日本列島における都城形成—大宰府羅城の復原を中心に—」  
『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集



国史跡指定記念 古代史トークセッション in 筑紫野  
歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

[参考文献]

九州歴史資料館 2023 『大宰府外郭線調査研究報告 I』

筑紫野市教育委員会 2020 『前畑遺跡第 13 次発掘調査 土塁状遺構の発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第 121 集

筑紫野市教育委員会 2021 『前畑遺跡重要遺跡確認調査』筑紫野市文化財調査報告書第 122 集



前畑遺跡をとりまく大宰府関連遺跡



大宰府政庁跡（南方を望む）  
（筑紫野市観光協会提供）



水城跡（太宰府・筑紫野方面を望む）



阿志岐山城跡第3水門石塁



基肄城跡東北門の礎石（唐居敷）

